

第 2 日目 技術セミナー

「REDD プラス phase3 へのシナリオ」総括

松本 光朗（森林総合研究所 REDD 研究開発センター長）

REDD 開発研究センターは 3 年前に設立され、毎年、このような国際シンポジウムを開催している。今年で 3 回目を迎えたが、毎年確実なステップが踏まれていると強く実感した。

3 年前の国際的なセミナーでは、「われわれの国はこうしたい」「今はこういう計画を立てている」といった話題が中心だった。それはもちろん重要であるが、昨年度からは着実な成果と経験をご報告いただいている。これは REDD コミュニティにとって、足場を固めるいい機会になっているのではないだろうか。「国際交渉では REDD プラスは合意できないのではないか」と言う人もいるが、実際には、各国、各関係者の着実な努力と着実なステップが刻まれているのだ。

今回のセミナーでは、1 日目には REDD プラスの大切さ、森林の保全の大切さを、一般の方々や企業にかなり広く浸透できたと思う。私どもはこれまで、どちらかというと狭い専門の中で、ハイテクの技術や技術開発を中心に活動してきた。しかし、それはあたかも東京スカイツリーのように細長いタワーを建てて、天に届けようとしているようなものだった。そうではなく、REDD プラスを国民運動、世界的な運動にする必要がある。そのためには、富士山のようなすそ野が広い、着実な組織化が必要だ。そのすそ野は、片一方では技術的、片一方では社会的な認知ということになるだろう。第 1 日目で社会的な認知が広がったと認識している。

第 2 日目の実際の取り組みを踏まえた技術的な経験の発表により、そのことを強く実感した。これは、富士山が上に伸びるための基盤になっていくだろう。このようなセミナーを毎年行うことによって、各国が着実な一歩を踏み出し、有益な経験を共有し、さらにこのコミュニティを広げる機会としたい。そして、ひいては気候変動の緩和策への貢献、世界での森林の持続可能な森林経営に結び付けたいと願っている。

2 日間、熱心に参加いただいた。会場からの熱気を強く感じている。これを消してしまうことなく、さらに大きく燃やすためにも、今日の経験とここで得たヒントを持ち帰って、各自の職場、コミュニティ、各国でそれぞれの努力を続けていただきたい。持続可能な森林経営が REDD プラス、気候変動の緩和活動を通じて達成できることを願っている。